

僕は模造人間

島田雅彦



新潮社

僕は模造人間

島田雅彦

ぼく、もぞうにんげん
僕は模造人間

発行——一九八六年四月二〇日

六刷——一九八六年一〇月二〇日

定価——九〇〇円

著者——島田雅彦

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——業務部(03)二六六—五一一
編集部(03)二六六—五四一一

振替——東京四—八〇八

印刷所——株式会社光邦

製本所——加藤製本株式会社

© 1986 Masahiko Shimada, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、この面倒ですが小社通信係宛に送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。

ISBN4-10-362201-6 C0093

僕は模造人間 ♪ 目次

第一楽章 はずれ玉 5

第二楽章 間男 41

第三楽章 賭博者 87

第四楽章 成熟 131

第五楽章 ブロツケン山の模造人間 167

付録 200

装帧*金子國義

僕は模造人間

——— どうだ、いやに明確な人間存在のこの輪郭は、他との
区別をはっきりたてるこの冷たい線は——— アア、形式！

ゴンブローヴィチ 米川和夫訳
『フエルデイドウルケ』より

第一樂章
はずれ玉

昔いた所は真暗闇で何も見えなかったが、音はよく聞こえた。僕は、塩辛いが、だしのよく効いたスープにつかつて、様々な音を聞いた。いつも聞こえていたのは太鼓の音と川のせせらぎだった。それはとても規則的でなぜか聞いているだけで眠くなった。だが、規則が乱れることもあった。時折、それらの音はピッチが上ったり、強くなったりして、僕を驚かした。そんな時、僕は根拠のない不安におののいたり、歓喜に身を震わせたり、また、思わず、柔かい壁を足で蹴ることもあった。音はこのほかにもいろいろあった。男と女の会話や子供の甲高い声、たくわんを噛むような音、おかしい音楽も聞こえた。全て、柔かい壁ごしに僕の体に伝わるのだった。何しろ、暗黒の世界である。聞こえてくる音はただ耳と体をマッサージするものに過ぎなかった。川のせせらぎとか子供の甲高い声は後年光の世界で聞いて、ああそういえばあの暗黒の世界でも似たような音を聞いたなと憶い出したということなのだ。

ある日、暗黒の世界を地震のようなものが襲った。世界全体が痙攣を起こしたように揺れ、柔かい壁が僕の足や頭を締めつけた。僕は必死に臍から生えているつるにしがみついていた。世界は次第に狭まり、じつとしているのが苦しくなった。そのうちつるがからまっている内壁が剥げた。スープがどんどん流出し、僕はその世界から亡命することを余儀なくされた。僕は頭に万力で締めつけられたような圧迫感を感じ、断末魔の叫び（ほかにいいようがない）を聞いた。それは女の悲鳴に似ていた。と、突然、閃光がきらめいた。これは胎児としての僕に死を告げる光だった。

僕は熊の手を持った若い産科医に頭をむんずとつかまれ、母親の子宮から引きずり出された時、すぐには産声をあげなかった。医師は慌てて僕の青いおちりをたたき、「泣きなさい」と命令した。僕は医師を殺人者と見立てて、死んだふりをして生まれたのである。分娩後一分も経ってからようやく、周囲の人を安心させる産声をあげた。それはそれは調子ばずれの吃ったような産声だった。

分娩室の外でオロオロしていた父は僕の産声を聞くや部屋に駆け込んで来たが、医師や看護婦の様子がいささか沈滞気味だったのを見て、障害児が生まれたのではないかと一瞬、肝を凍らせた。彼は僕が一つ目でも無脳症でもシャム双生児でもないことを知り、さらに

医師から事情を説明された。父はしばらく深刻な顔をしていたが、やがて微笑が滲み出て、しまいには大声で笑った。

僕は看護婦の手で体や顔についた母親の血液や粘液、藻のようからみついた粘膜を洗い落とされ、母の胸に抱かれた。

「この子は生まれた瞬間から親をからかって……」と彼女は力なくいった。

分娩室では再び爆笑が起こった。医師も看護婦も、母も腹痛をこらえて笑った。「よかった、よかった」と皆、口々にいった。何がよかったのか誰も知らなかった。その時、軽い地震が発生した。笑いは時が止まったように凝固した。一九六〇年のある日のことだ。

僕の誕生の経過はざっとこんなものです。僕にとって、誕生の瞬間というのは一種のシヨウミたいなもので、観客を動揺させる残酷劇でなければならなかったのです。または、僕は頭がはずれるほどグイグイ引つ張られ、半死半生の状態にあつたので、生きる意志を示すべく産声をあげる余裕がなかったのです。

父、サラリーマン、二十九歳。母、元デパート従業員、二十五歳。

例えば、収入を横軸に、人口の比率を縦軸にとつてグラフを描くと、僕の家庭は多数派に入る。横軸に支持政党、趣味、娯楽、学歴をとつても、だいたいグラフの柱が最も高い

ところに入る。絵に描いたような平凡、といっても平凡なものは絵になりにくいからグラフにでもするしかない。僕は貧困の幸福も裕福の不幸も味わわずに済んだし、出生にまつわる隠蔽された事実など、先に述べたことを抜きにしても、捏造しない限り何処にもなかった。僕は紛れもなくジャポンの平均的家庭の第一子であった。時にジャポンは所得倍増計画という、平均的ジャポ人を中産労働者階級に成上らせようとする怪しげなトリックに着手したところだった。

みんなお金持ちになるために働け、働け！ 文句をいう奴は民主主義的にお仕置きだよ。古くて汚ないおもちゃは捨てちゃいなさい。道路とビルディングをつくってあげるから、その中に新しいおもちゃを詰め込むですよ。

五日間、病院で過した後、僕は八畳一間にキッチンのついた家に連れて来られた。家のまわりはローラー・スケート場で、自動車がいい気になって走っていた。両隣りは同じようなつくりの平屋が息を潜めてしゃがんでいた。近所には公園と中学校が置かれ、歩いて二十分ほどのところには母の両親と弟、妹がこっそりと住んでいた。

祖父母にとって僕は初孫だったし、若い叔父や叔母にとっては乳児が珍品でもあったので、僕を愛玩動物としてかわるがわるあやすのを日課にしていた。近隣にも僕が人見知り

しないのをいいことに、この精巧なぬいぐるみを借りに来る連中が少なくなかった。

「カズヒトちゃん起きてる？」といいながら、親戚や隣人がサンダル履きで来るが、「今、ミルクを飲んで寝かしたところなのよ」と母が答える。「じゃ、また来る」といつて去るが、間もなくすると別の客が現れ、「カズヒトちゃん貸して」と叫ぶ。そうこうするうちに先程すごすご引きあげた客が再びやって来て、「もう起きた？」……僕が目覚めていようものなら、次から次へと僕を抱く相手は変わり……こんな言葉があれば、僕はまわし児だった。（昔、まわし芸者というのがいて、一度に何人も客をとり、あつちの座敷にこつちの寝床と飛び回っていました）僕は女の母性欲を癒す無償の娼児だった。何人の女が（男も少なくなかったが）顔面の筋肉を弛緩させて僕を眺めただろう。僕は彼女たちのピカソ的にデフォルメされた阿呆面に不覚にもニツコリ笑ってしまうのだった。

こんな調子で二歳まで売れっ子だったので、抱かれ癖がついてしまいました。自分より体の大きい人、俗にいう大人なら誰でも僕を抱いてくれるものと思っていたし、誰でも僕の一挙手一投足を注目していると信じていた。

僕がペンギン並みに歩くようになると、抱かれる人を選ぶ審美眼が芽生えた。近所に住んでいた近眼の、鍋にこびりついた味噌汁の残りのような女子学生が僕を抱こうと手を差しのべたが、僕は壁に当たったボールになって引き返した。

「この子は贅沢な趣味をしてるのね」といって彼女は悔やしがった。

三歳になる前に僕はあまり泣かない、人見知りをしない、おとなしい子であることをやめた。ある事件が直接の契機となった。

一週間ほど母が消え、叔母が僕の母のふりをしていたことがある。何かおかしいと僕は思っていたら、ある日突然、奇妙な音を出し、時々動く物体が床に転がっているのを発見した。しかも、それは僕と同じように手足や顔がついているのだ。母はそれを抱いて、あやしたり、お乳をやったりしたのである。母の裏切りか弟が僕になり変わってしまったのか、あるいは僕が二個になっちゃったのか……。

弟は僕に存在の危機をもたらした最初の罪人であった。僕は泣きに泣きました。なだめようとする母の手を振り払い、叔母の所へ逃げました。

弟は僕に代わって愛玩用ペットになった。しかし、彼は人見知りの激しい癩癪持ちで、時を嫌わずよく泣く騒音マシンだった。この異物は僕の外側にあつて、僕ひとりが浴していた恩恵を盗んだ。僕がもとの僕を取り戻すためにはこの異物になり変わらなければならぬのだ。同じ大きさのバナナでも人のが大きく見える普通の幼児であつた僕はこの時、自分自身を弟と取り換えて、よく泣く子になったのだ。弟は僕に処世術を教えた最初の教師だった。

僕が四つになった年、父はトキオとは言語も民族も風習も違ふある地方都市の支社に左遷され、一家四人は都落ちした。ここで僕は今まで近所にはいなかった同い年の子供たちと出会った。子供は自分だけだと思つてゐた僕が幼稚園にぶち込まれ、百人もの乱暴で狡猾な子供たちの未開社会で自らの生活圏を確保しなければならなくなつたのだ。この時第二の存在の危機が訪れた。僕はお絵描きやお遊戯や喧嘩という場を通じて、僕と同じような絵を描き、同じように喧嘩に弱い、同じような顔をした、僕の複製品を発見したのだ。

複製品は僕の真似をする。僕がブランコに乗ろうとすると、複製品も同じことを考えている。そこでブランコの奪い合いになるのだ。僕は複製品に横取りされるのが常だつた。指をくわえて、それをうらめしそうに眺めるうすのろ坊やの僕。こんなはずじゃなかつたと不満のあまり、貧乏ゆすりするのだが……。また、保母さんにチヤホヤされることを期待した僕は僕より自分をアピールする術に長けた園児の引き立て役しかできなかった。僕は王子のはずなのに……。

僕は王子たるために百人の園児たちを模倣しなければならなかつた。自分と弟を取り換へたように。それは面倒くさいばかりでなく、必ずしも成功しなかつた。

未開社会には強いが弱い、上手が下手かしかなかつた。そして両極端にいる者が王子

なのである。となれば、平均値である僕は煮ても焼いても食えない代物だ。権勢も誇れず、いたわりも受けない。ありふれているだけではどんな王子にもなれないのだ。僕の複製品たちは福引きのはずれ玉ほど多く、どいつもこいつも王子になりたがっている。

王子になろうとする僕の努力は童話やテレビ・アニメとの絆を深めた。家に閉じ籠り、一人よがりの王子になるしかないと言っていたふしがあった。

さて、僕はここで自分の名前との出会いについて話さなくてはならないだろう。僕はジャポンでは極めて珍しい姓名の持ち主だった。この不具の名前の発見はコロンブス級である。僕は数奇な運命を偽造する権利を獲得し、偽造技術に磨きをかけることになった。

亜久間一人——未だに安住できないし、するつもりもないこの名前の持ち主が僕だ。こんな名前を生まれつき背負った者は尻尾をつけて生まれた者とそれほどの違いはない。「五体満足ならばいい」というのは出産間近の夫婦の決まり文句で、僕の両親も何処かで使ったかもしれない。しかし、僕は五体プラスαで生まれてしまったのだ。プラスαのために僕はどれほど自意識過剰な少年に育ったか……こいつは一編の大河小説のモチーフになる。

僕が文字を知らないうちは平穩無事であった。僕は単に「アクマカズヒト」という音声

に過ぎなかったからだ。名前を呼ばれば、両親や近所の兄さん、姉さんにじゃれついたので犬と大した違いはなかった。僕の名前が意味を帯びて、僕をからかうようになったのは小学校に入った頃だった。何処にでもいるありふれた小学一年生の僕は自分の手で「あくま一人」と記名していた。象形文字かミロの絵画を彷彿とさせる六歳の子供の手になる「悪魔」と手抜き仕事を思わせる三本の線からなる「孤独」の結合のおぞましさは幼ない僕にも漠然と感じられた。僕は学校で「アクマ」とか「アクマ君」と呼ばれた。正確には「ク」にアクセントがなければならぬのだが、皆、面白がつて、「ア」にアクセントをつけた。従つて、僕は「亜久間君」ではなく「悪魔君」にならざるを得なかった。

「ぼくはどうしてアクマカズヒトなの？」と六歳の彼は母親にたずねた。

「ズーちゃんは世界にたつたひとりしかないからよ」と彼女は答えた。同じ質問を父親にぶつけると――

「パパやママがいなくなつても、世界中の人がいなくなつても、カズヒトはひとりで生きていける強い子になるようにと思つてつけたんだよ」といつて彼を脅迫した。

「アクマつて世界を破壊さす悪い奴なんだつてみんながいうんだ」

「人のいうことなんて気にしないことさ。カズヒトはひとりで悪魔に立ち向う勇者になればいいじゃないか」と父はいった。